



## PECS Intensive Program in Australia

### 研修報告

ピラミッドコンサルタント 門司京子

#### はじめに

私は、以前より海外で PECS のトレーニングを受けたいと強く思っていました。なぜなら、日本よりも PECS の普及が進んでいる海外に行けば、どのようにして PECS が広まるのか、どのような指導をしたら自閉症の子どもが楽しく機能的に PECS を学習することができるのか、そのヒントがたくさん見られると思ったからです。また、言語の異なる外国で PECS を使ってコミュニケーションを取るという体験を通して、コミュニケーションに必要なのは言葉をしゃべる能力だけによらないということ、身をもって知りたかったからです。今回、上司からオーストラリア研修の話があったときには、その場で「ぜひ行かせてください！」と返事をしました。私にとっては初めての海外であり、出発前には体調不良になり断念をしかけたこともあります。このチャンスを絶対に逃したくないという思いで 1 月中旬に出国しました。

この研修報告で、ピラミッド・オーストラリアでの実践や、プログラムの内容、私が体験してきた様々なことを皆さんに少しでもお伝えできればと思います。

#### 1 PECS Intensive Program について

PECS Intensive Program とは、夏期休暇中に月曜から金曜日までの連続 5 日間（アメリカでは 10 日間）、午前 9 時から午後 3 時の時間帯で行われる PECS の集中指導教室で、指導内容は PECS をはじめとするコミュニケーションに特化しています。集中的にコミュニケーションの指導を行なうように設定されているので、プログラム中、一日に 200 回ものコミュニケーションを取ることもあるということです。

プログラムへの参加費用はオーストラリアドルで 3,500 ドル、日本円にして約 30 万円と高額です。実は、近年オーストラリアでは『自閉症』と診断された子どもには 7 歳まで、年間 60 万円の補助金が国から出されるようになったそうなのです。その補助金をどのサービスに使うかは自由なのだそうです。プログラムの参加費用に含まれるサービスは、以下の通りです。

- ・ 30 時間のコミュニケーション集中指導
- ・ PECS コミュニケーションブック
- ・ それぞれの子どもに必要な様々な PECS の絵カード
- ・ ピラミッドスタッフによる 10 時間のフォローアップ
- ・ プログラム全体における個々の子どものサマリー

このプログラムでは、PECS を使った好きな物の要求のコミュニケーションだけでなく、その他の重要なコミュニケーションについても幅広く教えています。例えば、援助を求める、「これが欲しいの？」の質問に対して、頷き「はい」や首振り「いいえ」で答える、休憩を求める、「待つて」の指示に従う、視覚的な指示や口頭指示に従う、絵のスケジュールに従って活動する、周囲にあるものや起きている出来事についてコメントするなどです。このプログラムのもっとも重要な点は、機能的な日課の中で子どもにコミュニケーションを指導する点です。また一方で、プログラムに参加した後に家庭でコミュニケーションを教え続ける保護者へのサポートも行なっています。保護者は、プログラムの開始前に PECS ベーシックワークショップに参加しておくことが重要です。

このプログラムでは3歳から7歳の子どもを対象にしています。それに加えて、以下の条件のいずれかを満たしていないといけません。

- ・ 機能的なコミュニケーションが十分に発達しておらず、PECS を全く使ったことがない
- ・ PECS を使っているが、複数の絵カードの弁別が難しい
- ・ 複雑なコミュニケーションのニーズを持っている

## 2 教室環境

今回の PECS Intensive Program は夏期休暇中であったため、特別支援学校の作業療法室を借りて行ないました。学校はヤラビル特別支援学校と言ってメルボルン市内の閑静な住宅地にあります。キッチン、オーブン、シャワー室、トイレ、テーブルなどがあり、生活感の漂うオープンな環境でプログラムが進められていました。自閉症の子の療育環境と言えば、パーテーションで仕切られた構造化された空間をイメージする人が多いと思いますが、この教室ではほとんどパーテーションはなく、ごく普通の教室環境でした。

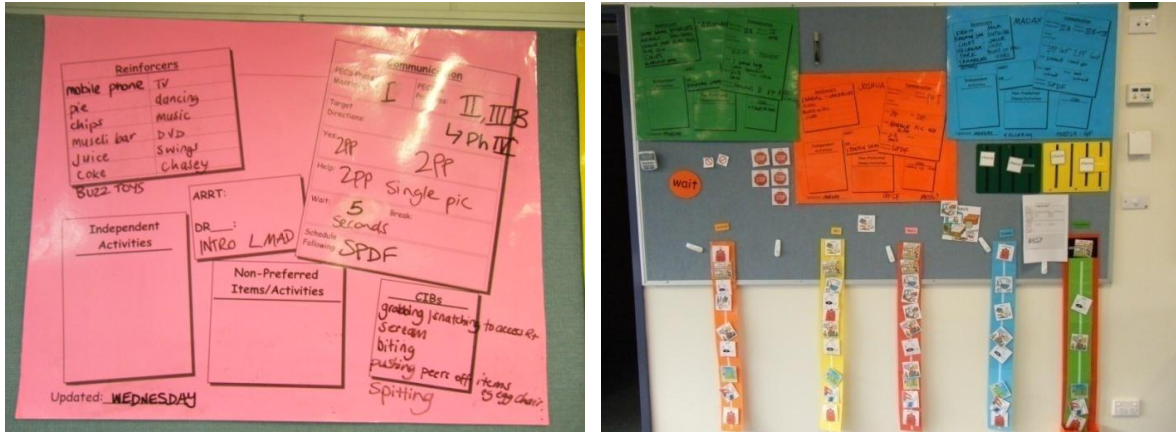


### 教室の様子とおやつ、昼食のテーブル

パーテーションはないが、色などで視覚的合図を多用していた。

### 3 プログラム内容

PECS Intensive Program は、5日間のPECS集中プログラムで、初日は子ども全員の好子アセスメントをします。私は、日本での業務の都合上2日目からの参加となり、アセスメントの様子を見ることはできませんでした。2日目から5日目までは、初日に行なった好子アセスメントに基づいて絵カードやコミュニケーションブックなどの教材を準備して、日中の機能的な活動の中でコミュニケーションの指導を行ないます。



**子ども毎の指導内容をまとめた用紙**：子どもに今何を教えているかをわかりやすくまとめたものです。PECSの進行状況や、指導中のコミュニケーション、プロンプトのレベルなどが書かれてあり、毎日更新できるようにボード用マーカーで書いています。子どもごとに壁に貼ってあり、全スタッフがいつでも指導内容を確認できるようになっていました。



**視覚スケジュール**：掲示板には、その場ですぐに使えるようにいろいろな絵カードが用意されていました。snack・work・lunch・cookingの絵カードは、子どもが次にする活動スケジュールを貼る台紙になるものです。それぞれの活動場所の壁に貼られていました。子どもたち全員が、まだ自立してスケジュールの操作ができないので、1枚ずつ提示して移動を促す段階でした。

### 4 子どもたちの紹介

今回のプログラムで出会った子どもたちは、どの子も本当に可愛かったです。プログラムに参加していた子どもたちを紹介したいと思います（写真撮影や紹介の許可は得ています。一部名前は仮名）。

**クリスくん**・・・先生のこともお友達のことも大好きな4歳の男の子。ご両親が PECS にとても積極的で、送り迎えのときは、兄と弟も一緒に家族全員で来られていました。お母さんがお父さんに PECS の使い方をアドバイスするなど、とても熱心で和気あいあいのご家族でした。クリスくんとの遊びで一番多かったのが“すもう”。ブックには“SUMO”カードがありました！くすぐられること、食べることが大好きなとっても愛嬌のある男の子でした。PECS の段階は属性語で動物のマグネットを使って色を学習していました。私はクリスくと遊びながら風船を膨らませて飛んでいくのが好きだとわかると、すぐに色違いの風船を見せて属性語で要求する指導をしました。何度もいろんな色を要求して遊びました。家に帰るときには毎日スタッフ全員に愛情たっぷりの KISS をくれました☆

**マダックスくん**・・・とってもイケメンな5歳の男の子。毎朝、可愛いキャリーバッグをからって、クールで素敵なお父さんの送迎できていました。彼は、人と関わるのが大好きで、特に大人に抱きかかえられることや、クルクルと回してもらうことなど、ダイナミックな遊びが好きでした。PECS はフェイズIVを習得中で、好きなお菓子や遊びを使って楽しく練習していました。



子どもたちはみんなとってもかわいかったです！！  
国境を越えて子どもたちとコミュニケーションが  
れたことに感激しっぱなしの私でした。

**ジョンくん**・・・少し発語のある4歳の男の子(双子の女の子がいて髪がソバージュで人形さんのように可愛らしい！)。カッコいい“BATMAN”の T シャツを着ているなどと思ったら、下に日本語で「バット人」という文字が併記してあったのには苦笑しました。PECS はフェイズIVを練習中で、時々文カードの交換のときにカードを読むこともできていました。外で遊ぶことや毛布ブランコが大好きで、PECS を使って何度も何度も要求してくれました。彼は、このプログラムの間に有意味の発語が増え始めており“I want cookie”と言って要求することもありました。可愛い声で意味のわからない言葉「オカパイピー」を連発することもありました。初めは、日本のアニメのピカチュウ(あるいはまさか某芸人のギャグ?)をまねているのかと思ったのですが、後で“Rock a bye baby”という子守唄とわかりました。確かに毛布で揺らす時に何度も言っていたことに気が付きました。さらに帰りがけに耳を疑うようなことが起こりました！それは、母親とソフィーが話している横で『おばさんちいく！！』という日本語をはっきり2、3回繰り返して言っているのを耳にしたのです。この場で唯一この言葉がわかる私は、このとき本当に驚きました。これからの成長が本当に楽しみです。

**ニーナちゃん**・・・紅一点の5歳の女の子。傘(ボロボロの雨傘ですが・・・)をさして外を歩くことが大好きで、その姿はまるで女優のように優雅でした☆。水へのこだわりが強く、長い時間シャワー室にこもってしまうこともありました。シャワーをしっかりと浴びた後は、寒さで震えているにもかかわらず、しっかりとアイスクリームを食べていました(> <)好きな遊びを見つけたらものすごい勢いで PECS を使って何度も要求できていました。特に、毛布ブランコで揺らされたりや筒状になった布に包まれたりすることが大好きな女の子で、そこにジョンく

んやクリスくんと一緒にすることもあり、持ち上げるのが重くて大変でした。おかげで腕っ節は強くなったかもしれませんが。

**ウィルくん**・・・年齢は6歳くらいで PECS はフェイズVIまで進んでいました。彼は、周囲の人への興味があり強くない自閉症の男の子で、こちらからの働きかけにもとても反応が薄かったです。この子と何を介して関わりを持とうか・・・とずっと考えて過ごしました。結局ほとんど関わりを持つことができないままでしたが、彼はとても理解力があり、大人からの口頭指示はよく理解できていました。細長い葉っぱの感触や車輪のついた椅子に乗って遊ぶことが好きでした。他のスタッフも、どのようにしてコミュニケーションの機会を作り出そうかとアイデアを出し合っていたのがとても印象的でした。次の写真は、彼のコミュニケーション場面です。



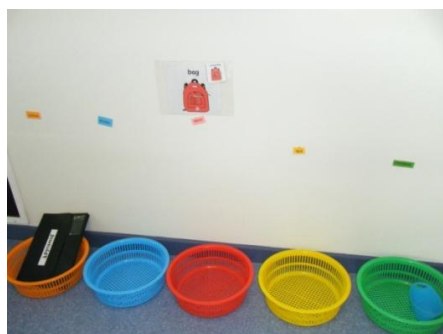
**PECSがあればこんなに長い文も作れます。**



**属性語にも取り組んでいます☆**

## 5 一日の流れ

早い子どもで8：40くらいに親御さんが教室に連れてきて、9：00には5人の子ども全員がそろいます。到着した子どもからその日のスケジュールが始まります。まずは、荷物の整理から行ないます。子どもたちには、全員自分のコミュニケーションバインダーがあり、教室に来るときには家から自分のバインダーを持って来ます。そして帰りには自宅へ持って帰ります。



### 荷物置き場

(色別に自分の置き場所がわかるようになっていました)

一日の大まかな流れは決まっており、その中で個々の状況や興味に合わせて比較的柔軟に活動を行

なっていました。具体的な活動の内容としては、荷物整理、室内での玩具や粗大遊具遊び、集まり、屋外での粗大遊具遊び、簡単なおやつ調理、創作活動、おやつ、昼食、シャワールームでの水遊びなどがありました。全体での活動は、集まり（4日間のうち1度だけ行なわれていた）のみで、その他は全て個人のスケジュールで動いていました。このプログラムでは、一人当たり1日約60回のコミュニケーションを行なうことを目標にしていました。1日100回ものコミュニケーションを行っていた子どももいました。



お集まりの中で歌の要求をする子どもたち。写真に写っている人は、PECS ベーシックワークショップ受講者の中から募集したボランティアさんたちです。とても熱心な方たちでした。

荷物の整理が終わった子どもから室内での遊びを始めます。このとき、自由におもちゃを取って遊べる環境にしていると、それを要求する必要性がなくなり、コミュニケーションの機会を失うので、スタッフは子どもが自由に取れないように棚の上におもちゃを置いたり、ロッカーに入れておいたりするなど、意図的にコミュニケーションの機会を作り出す工夫をしていました。また、午前中は比較的少なめにおもちゃを用意しておき、徐々に他のおもちゃを出していくといったように、おもちゃに対する新奇性を大切にしていました。子どもがあるおもちゃに興味を持ったら、それをコミュニケーションの機会に使います。全ての子どもがPECSを使って好きなおもちゃやスタッフとの関わり遊び、おやつを要求していました。



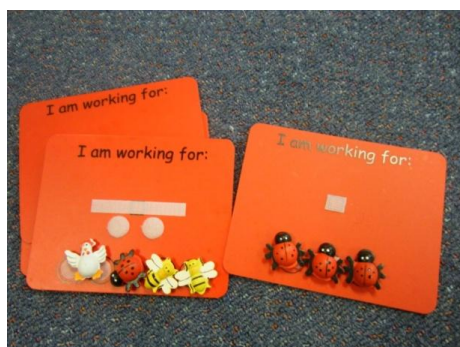
### プレイエリアの一部

(子どもたちは、マットの上に限らず部屋の半分を使ってダイナミックに遊んでいました)

PECSの進行状況も子どもによって様々なので、その子どもの進行状況に合わせて指導を行っていました。初めは子どものことを良く把握できていませんでしたが3ページにある指導内容の表を見るとすぐにわかりました。このプログラムの中では、コミュニケーションを優先させているため、おやつも子どもの要求に応じてその都度あげていました。昼食の時間帯も子どもによって異なり、自分から要求する子どももいればスタッフからの促しで昼食を開始する子どももいました。昼食も重要なコミュニケーションの機会であるため、PECSを使って食べたい物を要求していました。



おやつ時間に、PECSを使って欲しい物を要求している子どもたち。  
離れたところにいるスタッフにもきちんと要求できていました。



### トークンボード

課題を行ったら、トークンを集めて  
おやつと交換。トークンとして、市販  
のかわいいマスコット人形を使って  
いました。

午後2：30から3：00の間に親御さんが迎えに来て、スタッフがその日の子どもの状況やトレーニングの進捗状況を説明し、各自が車で帰宅します。

## 5 データ収集と集計

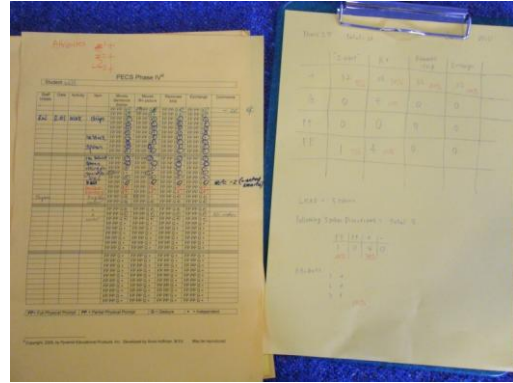
データ収集は、活動中いつでもどこでも、PECSに関わらず標的としているコミュニケーションが生じたら記録を取ります。記録用紙は子どもごとに色分けになっていて、各用紙をバインダーに綴じたものを複数用意して教室のあちこちに置いておきます。コミュニケーションパートナーが相互作用の直後に取る場合もありますし、「キヨコ、ちょっとクリスの記録お願い！」と叫んで、そばにいるトレーナーに頼んでその場で取る場合もあります（注：英語圏の人は、私の名前の「きょうこ」を発音するのが難しいようで、「キヨコ」と言っていました）。

子どもたちが帰った後は掃除や片付けをしてから、すぐにその日のデータの集計を行ないます。バインダーから色ごとに用紙をまとめて、スタッフで分担してデータの集計を行ないます。何回コミュニケーションをする機会があったか、どれくらい自立してコミュニケーションできたか（プロンプトの度合い）などを集計して、ディレクターのソフィーがパソコンに打ち込んでいきます。最初は少し複雑で戸惑いましたが、だんだん慣れてきました。私が集計した結果を報告するとソフィーが「それ

はすごい、キョコ！今日はたくさんコミュニケーション取れたね！イエーイ！」と全身で喜びを表現してくれて思わず嬉しくなりました。そして『これが、私たちがデータを取る好子になっているんだあ！』とハッと気がつきました。その日の結果を基にして翌日の PECS の指導内容の変更を決定し、3 ページにある指導内容をまとめた表に書きこみます。



データの集計をしているスタッフ  
左からボランティアさん、中央がディ  
レクターのソフィー、右がレベッカ



コミュニケーション記録用紙（左）  
集計用紙（右）

## 6 まとめ

このプログラムに参加して、“とにかくもっとコミュニケーションの機会をたくさん作り出す療育を日本でやろう！！”と思いました。コミュニケーションは、生活している限りいつでもどこでも必要で、PECS はそれを可能にしてくれる重要なツールであることをこの4日間で改めて感じました。親御さんの PECS への関心がとても高かったのには本当に驚きました。PECS を使ってコミュニケーションを教えるポイントとして、子どもの好きな活動、興味のあるアイテムをうまく使うこと、コミュニケーションの機会をいかに見逃さずにとらえるか、PECS を一日の生活のあらゆる場面で使うことなどが挙げられます。人への興味関心の薄い自閉症の子どもでも、こちらの関わり方やアイデア次第でたくさんのコミュニケーションの機会を作り出すことが可能であることも学びました。ひとつのアイデアとしてこのプログラムでは、子どもと大人のコミュニケーションだけでなく、子ども同士のコミュニケーションにも取り組んでいました。ある子どもが遊んでいる玩具を他の子どもが欲しがったとき、スタッフは PECS で相手にそれを要求するようにプロンプトしていました。とにかく子どものあらゆる行動を一瞬にしてコミュニケーションの機会に変えるというスタッフの神業には思わず見とれてしまいました。

私は、国籍問わずコミュニケーションを取ることができる PECS を本当にすごいコミュニケーションツールだと思いました。プログラムに参加していた子どもたちが PECS のブックを自分の身体の一部のように持ち歩いていた姿を見て、このシステムがたくさんの子どもたちの生活を豊かにすることができるもののひとつであることを思わずにはいられませんでした。日本にいるコミュニケーションに困難を抱えた人たちにももっと広く使ってもらえるよう、これからも日本での普及活動を続けてい

きたいと思いました。そして、この PECS Intensive Program を、夏休みを利用して日本でもぜひ開催したいと思っています。



PECS は、外遊びでももちろん子どもたちの必需品。  
コミュニケーションはいつでもどこでも必要です。

また、多くの人が苦手意識を持っているデータ収集も、とても効率よくそして効果的に行なっていたことに感銘を受けました。その場その場で記録を取ることで、後でビデオなどを見ながら記録を取り直す手間も省けます。さらに PECS で自立してコミュニケーションを取れた割合を出すことが次のフェーズに進む目安になるので、同じフェーズをいつまでも続けてしまう問題もなくなります。子どもにとっても教師にとってもとても効率的だと思いました。PECS の記録は必ずしもコミュニケーションパートナーが取るのではなく、気付いたスタッフがその場で代わりに書くといった場面も多々見られました。とにかくスタッフ全員が常に他のスタッフや全ての子どもに目を向けて全体を把握できているのです。そのため、必要なときにはすぐに他のスタッフがプロンプトに入ったり、一貫性のある関わり方や指導がなされていたりしました。スタッフ同士のコミュニケーションがとてもよく取れていて、チームで教室を運営しているという印象を強く受けました。

印象的だったことのひとつに、クリニカルディレクターのソフィーが私に尋ねてきたことがあります。「親御さんの中には、『子どもにもっと勉強を教えてください！』と言う人もいて、コミュニケーションの方が大事ということを知ってもらうのにとっても苦労しているのよ。日本でも同じようなことがあるかしら？」と聞かれ、私は「Yes！」と答えました。勉強ができるようになって、人とのやりとりができなければその知識を活かすことはできないので、私はやっぱり何よりもコミュニケーションが大事だと思います。

たくさんのアイデアと PECS の重要性、日本での PECS の普及活動に対する意欲など、たくさんのことを得ることができた研修でした。

**★PECS Intensive Program の日本での開催が決まれば、ホームページ**

**に掲載し参加者の募集も行ないますので、興味をお持ちの方**

**はぜひチェックしてみてください。** [www.pecs.com](http://www.pecs.com)

## Australia 研修報告 番外編

今回、初めての海外でしたが、オーストラリアのメルボルンを訪れて感じたことのひとつに、障害のある人が街にたくさん出かけているということでした。身体障害の人、知的障害の人、精神障害の人、本当によくすれ違いました。でもほとんどの人が付き添いなく一人で出かけているのです。見かけるたびに“自立”という言葉が浮かびました。カフェでコーヒーを飲んでいたり、オシャレなショッピング街をまわっていたり。とても自然に街に溶け込んでいました。そんな場所で、私は“人と同じであることが良いこと”という感覚を全く感じませんでした。むしろ、“一人ひとり違って当たり前” “いろんな人がいて当然” という空気の中で私自身とても心地良さを感じました。人の目や、人からの評価を気にせず素の自分でいられることの心地よさを初めて感じた1週間でした。

今、関わっている自閉症の子どもたちも将来、地域での自立した生活を楽しく送れるように、そのためのお手伝いできればと思います。



これ街の人ばかりの中で見かけたん

ですけど何だと思えますか・・・？

実は全員本物の人間です(><)

突然動きだすのが怖かった・・・;